

十二月心光寺定例聞法会のご案内

- *期 日 平成十四年十二月十六日(月曜日) 《*毎月十六日》
- *時 間 十六日(昼席)午後一時三十分より (夜席)午後七時より
- *会 場 (昼席)心光寺本堂 (夜席)心光寺庫裏
- *講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

心光寺からの便り

いよいよ今年も師走しわすとなりました。
木立ちの枯葉が次第に削そぎ落とされ、
裸はだかになった梢こずえが冬の澄み切った空
に伸びています。寒風の中にも自然
の簡素な美しさにはとさせられる
この頃です。皆様如何お過ごしで
しょうか。

さて、先月十六日、十七日、御正
忌報恩講を滞とどりなくお勤めするこ
とができました。お汁番の谷平組の
皆様方、また立派な仏華ぶつかを立ててく
ださいましたお華講はなこうの皆様方、また
総代長さんをはじめ各総代の皆様方、
前準備からいろいろとお骨折りくだ
さいまして有難うございました。

お参りくださいましたご門信徒の
皆様方、またはるばる北海道からお
いでくださいました辻山さん、須崎



さん、佐藤さん、金森さんをはじめ、大石先生のお話を聞くために各地からおいでくださいました皆様方にも心より御礼を申しあげます。

今回は私が住職になって始めてお迎えする御正忌報恩講でした。その報恩講を大石先生をご講師にお迎えしてお勤めすることができましたことは、私にとりましてこの上ない喜びでありました。大石先生のお話をお聞きしながら、またお参りくださった皆様方の尊いお姿を拝見させていただきなから、住職の任命を受けたことが、個人的なことではなく、大事な使命をいただいたことだとあらためて感じさせられました。

さて、今年六月のことになりますが、二男の誓吾がオートバイの事故でしばらく入院したことがあります。誓吾は大石先生のお話は聞かないのですが、先生を尊敬しているのはわかっていました。それで家内と相談し、入院中の励ましになればと思つて、六月三十日、大分県三光村の八面山荘でおこなわれた念仏同朋研修会の最終日に先生のお部屋にお伺いうかがしました。そして色紙を二枚お渡しし、誓吾の今の状況を伝えて、何かお言葉を書いてくださいとお願ひしたのです。

すると間を置かず七月三日付で、お願いしていた色紙がお手紙といつしよに送られてきました。その色紙とお手紙はすぐに誓吾に渡しました。今は福岡市内でアパート暮らしをしている誓吾の部屋に掛かっているはずです。渡す前に複写しましたので、私たちも時々拝見させていただいています。あれから五ヵ月が経過そうくわしました。誓吾のためと思つて書いてもらったのですが、いろいろな問題に遭遇する度に、私たちもまたそのお言葉によつてどれほど励まされたか知れません。誓吾のお陰だと感謝しています。それで今月の『心光寺からの便り』で、その色紙のお言葉をお手紙とともにご紹介したいと思ひます。まずお手紙は次のようなものでした。

「八面山荘の研修会にご夫婦お揃いそろでご参加下さいましてありがとうございます。三十日帰宅しまして、七月二日は私の家の定例法話会でした。(中

略)今日は明けて七月三日。朝食を済ませて、久しく使わなかつた硯、筆をとりだしました。水道の水を少し注いで墨をすりました。久しぶりです。宮



心光寺御正忌報恩講で大石法夫先生のご法話に真剣に聞き入るご同行様方
(H14.11.16.心光寺本堂にて)

岳さんからあずかりました色紙をとり出しました。前日から考えていた言葉を便箋に書いております。誓吾君への言葉です。

私は生来、言葉が不明瞭で、親からも師からも注意を受け続けてきました。今もそれはなおりません。業丸出しで皆さんに対して法話を続けています。でも皆さんは業の中に響くものを感じとって下さるか、私は背後に働き給う仏様の願力に救われて毎日往生の旅を続けています。

又、私は生来字が下手です。それを恐れたら誓吾君

へ色紙に書いてさしあげられません。ただたどしいけれど、今朝書かせていただきました。私のように業の深い者でも仏様は助けて下さる。そのことを誓吾君にお伝え下さい。

大牟田の十日のご法座のときでよいと言われましたが、書いたら一日でも早くお渡ししたいと思しますので郵送します。」

このように大石先生はお手紙の中で、先生自身が業をさらけ出して生きておられることを書かれた上で、「私のように業の深い者でも仏様は助けて下さる。

そのことを誓吾君にお伝え下さい。」と書かれました。そして色紙には次のようなお言葉が書かれていました。

「仏様は誓吾君と同じ心、同じ言葉、同じ行動となり給うて救います。」

「私は忘れていても、仏様は寸時も私のこと 忘れたまわず」

私はこのお手紙のお言葉や色紙のお言葉に接するとき、そこに大石先生その人が余す所なくあらわれていることを感じるのです。すなわち先生は常に相手の苦しみに真向かいになり、ご自身の業ごうの全てをさらけ出しながら、その業ごうを通して念仏に出会われた体験を語られます。それを実感から言えば、私どもが苦しんでいる時に、苦しんでいる当の私どもよりもさらに私に近い所におられる。もっと言えば、苦しんでいる私のさらにその下におられる。そういう感じがするのです。

それは家内が身边に起こった心の苦しみをファックスで大石先生に訴えたと き、折り返しすぐにファックスで返信してくださいだったお手紙にもよくあらわれています。私どもだけで独り占めしておくのは勿体ない気がしましたので、先生に了解を得て、そのお手紙もここに掲載させていただくことにしました。

家内がファックスを送ったのは十一月四日の朝のことでした。するとその日の夜、次のようなファックスが大石先生から届いたのです。

「宮岳 信 様

平成十四年十一月四日（夕方六時）

今日朝食後、信さんからのファックスがとどきました。他の仕事をしておりましたので、すぐには返信できませんでした。信さんからのファックスの文面、一部だけ抜き書きします。

『本当にお念仏の大切さも知らず、解わかった顔して、知らん顔して、もう知つちよると思っていましたし、先生の言われたことも、自分を知らない者に

とっては、くやしいだけの疑う根性しか持っていない私でした。…』

私は今日、ふと昭和三十年頃、私が仏敵ぶつてきと見なされる行為をしたことを思い出しました。入苑にゅうえん以来学苑生がくえんせいと一緒に私達家族も食事を共にしていました。三人目の子が生まれる前です。林家の屋敷内に学苑の宿舎もありますし、私達家族の住まわして頂いている部屋もあります。別棟べつむねとなつていますが六畳一間です。赤ん坊が一人増えると、寝返りうつても危険を感じました。それで私が師匠様に申し出て、屋敷の囲いの外にある林家の借家に住まわせて頂くことになりました。入苑八年目にして別世帯になったわけです。

でもその借家はわら葺ぶきにトタンをかぶせてあり、海寄りのトタンはつぎ目がさびてくさっていたのでしよう。風が吹くと、トタンがめくられて、パタンツとわらをたたきます。天井がないから台風の時にはわら屑くずやすすが落ちます。危険を感ずるので家の中におられません。妻子を林家の母屋の方に退避たいひさせておりました。私はから元氣でもトタン屋根むねの棟むねに重石おもしになって坐つていたことがあります。貧乏はする。住居は落ち着けない。でもその位のことには戦時中は国民全体が耐えてきたことです。

私は戦後、仏道を求めて教団に入れて頂きました。でも時を経るに従って、仏様とは反対の方向にさ迷ってゆく自分の姿に気付きます。「もうそろそろ」と師は私にご法座の前席をつとめるように申されます。それが段々できなくなつたのです。

師のお言葉はお浄土からのお話です。私は迷いの娑婆しやばに住して、自分の考えたことを話しておるのです。それも今だから言えるのです。当時とはかく人の前に立って話すのがこわかったです。そんな心でご法話はできません。でも教団に入れて頂いている以上、又、はなばなしい求道の門出があり、学苑がくいん在苑者ざいえんしやの先輩である以上、どうしても本堂で法話をせねばなりません。師の指名ですから。

その頃、私は『黒衣こくえ』を家の庭で焼いてしまいました。その衣ころもは、入苑後、衣類いりの商売をしておられた同行さんがくださった上質たんものの反物で、私の妻が手縫ぬいいで作ってくれた布袍ふぼうでした。それを耳にされた師は『大石は恐ろしい根

性をしておる』と言われました。『こんな心で仏法がわかるか。林の春子は、お坊さんの衣を触るだけでも勿体ないと幼い頃から思っておったというぞ。』
何故私がそういうことをしたか、今でも説明しかねます。その時は妻も残念がりました。とにかく人前で法話をしたくない、そのことだけだったようです。そういうことを今日思い出しました。私は寺に住まわせて頂きながら、仏様から逃げ廻ってきた人間です。根限り逃げてゆきました。ここまで逃げたら大丈夫（？）と思っていたところでKさんによつて私の正体を照らし出されたのです。

今日は朝から真宗聖典の『教行信証』の結文を開いたまま机の上においてあるのを、机につくと拝読させて頂きます。

『慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し』

とるに足らぬ凡夫が善き師にお会いできたら助けて頂ける。私の一生はそれを証明させて頂く人生だったように思われます。

明朝高岡市の定例法座に出講させて頂きます。今は私は皆さんの前でご法話させて頂く程元気がです。と申しますより、ご信心がはつきりさせて頂きます。皆さんに助けて頂いているのです。

十六日心光寺に参上させて頂きます。」

以上です。家内はこのファックスを読んだとき、驚き、そして声を上げて泣いたと言いました。鬼の心となって落ちていく心に静かに寄りそって、苦しむ心をすーっと掬い取ってください。そんな心を感じたと言いました。お便りの最後に書かれてあったお言葉、「十六日心光寺に参上させて頂きます」このお言葉が、どんな鬼の心をも恐れず、「待っておれよ、必ず行くからな」と言っておられるように聞こえたと言いました。

先生は今度の御正忌報恩講のご法話の中で、「信心いただいたら、どんな業があつても障えられずに生きていける。光に遇ったら自分がどんな業も持つてい

るということを知らせてもらう。」そういう意味のことをお話されました。家内に対するファックスのお便りに、そのお話の通りのお心があらわれています。

先生のお話は分からないという声をよく聞きます。しかし先生のお話は分かる、分からないという領域をこえて、先生の八十一年の生涯の歩みそのものが、一言で、南無阿弥陀仏のご苦勞をあらわしています。そういうふうにはいただいています。先生が南無阿弥陀仏だということではなく、南無阿弥陀仏に出会われた先生の歩みの上に、一切衆生を救わずんばやまずという南無阿弥陀仏の大悲の御心そのものがあらわれています。誓吾に対してお手紙や色紙のお言葉にしても、家内に対するファックスのお便りにしても、それは正に南無阿弥陀仏のお心そのものであると私はいただいています。

如来は高いところにいて私を救うではありません。それどころか私が闇の中に呻吟するとき、私より近い私となつて、私を救い給うのです。

私より近い私とはどういう意味でしょうか。一体そんなものがあるのでしょうか。私は私そのものであつて、その私より近いものなどあるはずがない。そう私は固く信じて疑いません。しかし仏の教えの上からは、そのような〈私〉こそ、わが身の事実から最も遠い存在なのです。なぜなら〈私〉は、私が思い通りになることをのみ求めていて、思い通りにならなければわが身でさえも嫌い見捨てていくからです。

私の持つそのような意識の構造を、曇鸞大師は『浄土論註』の中で、「攀厭ぜんじょう」と訓みます。つまり下位の私を厭いとい、上位の私であることを目指して攀よじ登のぼるうとすることです。そのような誤った禅定ぜんじょう（心の安定）を常に求めているのが私であると教えてくださっています。

つまり「禅定ぜんじょう」という言葉は、ここでは私の価値基準の物差ものさし、そしてその中での上昇志向的な心のあり方をあらわしているとみることができます。善と悪、真と偽、美と醜等々、そういったもろもろの価値基準の物差ものさしで自分や周りまわりの人や事物を当てはめ、その物差ものさしの下位を厭いとい、上位を目指して這はい登のぼろうとしている。そういうあり方をしているのが〈私〉の意識の構造です。

そういう〈私〉にとって、もしも私ものさしがその物差の下位に位置せざるを得ないとしたら、そういう私の存在を、〈私〉はどうして受け入れることができません。たとえそれが自分自身であろうとも。

そのような「攀厭はんえん禅定」の〈私〉こそ、私の身の事実から最も遠いものにならないということができません。

これに対して如来は、〈私〉が見捨てるようなその私となつて、私を救い給うのです。いかなる私であろうとも決して捨てないのです。世界中の人が捨てても、如来が私を捨てることはありません。

ところでいくら如来が私を見捨てないといつても、私と如来が別々なら、最後のところでは、やはり如来も私を見捨てるのではないかという疑念が私の中に残ります。ところが如来は私となり給うのです。闇の中に呻吟しんげんする私そのものとなり給うのです。そして最後まで私と運命を共にされ、私を担にない続けられるのです。

そのような如来の徹底した大悲心をあらわしてくださっているのが、

「仏様は誓吾君と同じ心、同じ言葉、同じ行動となり給うて救います。」

「私は忘れていても、仏様は寸時も私のこと 忘れたまわず」

この二枚の色紙のお言葉だといっています。

大石先生のご著書に、ご師匠とうげの藤解先生とうげの次のようなお言葉が紹介されています。

「何年も前です。今は故人となられた前坊守ぼうもりの林の奥さんにお師匠様が申されたそうです。

『悟りの極意ごくいを話そうかの。春子（林の奥さんのお名前）を救うてくれる仏様は、春子と同じ格好かっこうをして、同じ心をして、同じことを話す、春子と寸分違わん仏様ですよ。』

（『どうなるうとこの道一』三十九頁）

「春子と寸分違わぬ仏様」というところに、汲くめども尽くせぬ深い教えがあります。「春子」だけであれば、仏法も何ありません。また「春子」と別にあ

る仏様なら、最後は疑いです。ところが「春子と寸分違わぬ仏様」ということになる、それは「春子」そのものです。同時にそのまま仏様であるようなものです。そういう仏様は、闇の中に呻吟する私そのものにまでなつて、私の苦しみを担い、最後まで私と運命を共にされる仏様です。そういう私と離れぬ仏の大悲心を、二枚の色紙は教えてくださっています。

大石先生が家内に書いてくださったフアックスのお便りも同じです。

大石先生は家内の手紙を読んで、大事な上等の黒衣を焼かれた若い頃のできごとを思い出されました。しかも「何故私がそういうことをしたのか、今でも説明しかねます」と書いておられます。私はその表現に、表層の意識がとうてい届かぬ心の暗部、自分にも説明できない心の深淵に直面して立ちつくされる若い日の先生の心の内側を垣間見る思いがしました。

大石先生の作られた「光あり」という歌の中に、「歩み続けたこの道一つ 心の闇路を幾十歳」とある通りです。このような心の闇路を抱いたまま、何十年も歩んでこられたのです。

私は大石先生のこのお手紙を読んだ時、まず一番に「悪人」という言葉を思いました。大石先生が一切の衣を自ら剥ぎ取って、「私は悪人だ」と告白され、「その悪人の私が念仏に出会ったんです」と、そう言ってくださいているように感じたのです。

ちょうど『歎異抄』九章で、弟子の唯円が自分の心の悩みを恐る恐る申し述べたところ、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじ心にてありけり」とおっしゃったことを思い出します。「親鸞もこの心でずっと苦しんできたが、唯円房も同じ苦しみにいたのか」というお言葉です。

もしもこれを「唯円房もそのことで苦しんでいたのか。実は私も同じだ。」とおっしゃったとしたらどうでしょうか。同じようにみえるけれども、そこには微妙な違いがあります。「私も同じだよ」と言ってくれることは慰めにはなりますが、それはやはり人間心の領域です。つまり同情心です。私の所まで下りてくださったということ。そういう同情心でどうにかなるものではありません。

これに対して、「親鸞しんらんもこの不審ふしんありつるに、唯円ゆいえん房ぼうおなじ心にてありけり」
このお言葉に接した時の唯円ゆいえんの実感じかんは、親鸞しんらん聖人しょうにんが私の所ところまで下りてきてくだ
さったというようなことではなく、むしろ悩みを訴えた唯円ゆいえんのさらにその下に
親鸞しんらん聖人しょうにんが居ゐられたという驚おどろきではなかったかと思おもいます。親鸞しんらん聖人しょうにんが一番救
われない者ものとなつて、その底そこで唯円ゆいえんの苦くるしみを受けとめておられる。そういう
心こころを感じたのではないかと思おもいます。

つまり「悪人あくにん」ということことです。親鸞しんらん聖人しょうにんが唯円ゆいえんに対して、自分は悪人あくにんであ
ると告白こつぱんしておられるのです。「私は一番救すくわれない悪人あくにんである。その悪人あくにんの私
が念ねん仏ぶつに出会いつたのです」と告白こつぱんしておられるのです。この心こころは人間心にげんしんではあ
りません。これこそ南無阿弥陀仏なんぶあみだぶつです。

南無阿弥陀仏なんぶあみだぶつの修行時代しゆぎょうじだいの名前なまえを法蔵菩薩ぼうぞうぼさつといいます。この法蔵菩薩ぼうぞうぼさつは、

「たとわが身みはもろもろの苦毒くどくの中に止とまるとも
わが行ぎやうは精進しやうじんにして 忍従にんじゆうして終つひに悔くいじ」

『大無量寿経だいむりやうじゆきやう』

と誓ちかつて歩あみ始めはじめました。苦毒くどくとはインドの原本げんぽんでは「アビーチ」となつてい
ます。つまり阿鼻地獄あびじごく（無間地獄むけんじごく）のことです。「たとえこの身みが無間地獄むけんじごくの中
に止とまり、終つひにそこそこから出でることなく終つひわるとしても、私は喜よろこんで黙もくつてこの
行ぎやうを行なじて、悔くいることことはありません」この行ぎやうとは「群生ぐんじやうを荷負かふしてこれこれを
重担じゆうたんとなす」『大無量寿経だいむりやうじゆきやう』といいう行ぎやうです。大地だいちに這はいつくばつて生きざる
を得えない衆生しゆじやうの重荷じゆうかを背負せおつて、たとえ足あしで踏ふまれても、黙もくつて踏ふまれつづけ
て決して下くだろささないといいう行ぎやうです。一番損しんして目立めだたないこの行ぎやうを喜よろこんでやら
せてもらもらいます。法蔵菩薩ぼうぞうぼさつはそういいう誓願せいがんを建たてて修行しゆぎやうを始はじめたのです。

その法蔵菩薩ぼうぞうぼさつが南無阿弥陀仏なんぶあみだぶつの魂たまです。「私は悪人あくにんです。その悪人あくにんの私わたしが念ねん仏ぶつ
に出会いつたんです」と告白こつぱんされる大石先生おおいしせんせいのお手紙てがみ、また『歎異抄たんにしやう』九章しんらんの親鸞しんらん
聖人しょうにんのお言葉ことばの上に、その南無阿弥陀仏なんぶあみだぶつの魂たまがあらわれています。南無阿弥陀
仏なんぶあみだぶつにほんとうに出会いつたが故ゆゑに、その人ひとの上に南無阿弥陀仏なんぶあみだぶつの魂たまがあらわれて
いるのです。

また、「仏様は誓吾君と同じ心、同じ言葉、同じ行動となり給うて救います。」
ここにも私を担になって今現に修行される法蔵菩薩ほうぞうぼさつの生きた姿があります。

ところでそんな法蔵菩薩ほうぞうぼさつの話など単なる作り話ではないか。そう思われる方もおられるでしょう。けれども私の宿業しゆくごうを担になって黙って生き続けている「わが身」というもの。実際は「私」がそれに支えられているにもかかわらず、「私」はそれを忘れ、無視し、足蹴あしげにしている「わが身」というもの。そういうわが身の事実を、一つの生き生きした物語で象徴しょうちゆうてき的にあらわしたものが法蔵菩薩ほうぞうぼさつの物語です。そう私はいたゞいでいます。

そうであれば法蔵菩薩ほうぞうぼさつは作り話どころか、「私」より近い私です。「私」が常にそれでありながら、それから遊離ゆうりして見失っているところの私そのものです。そのような私の立脚地りつきやくち、私の帰り場所、それが法蔵菩薩ほうぞうぼさつです。

そのようなことを、大石先生が私どもにくださった色紙、お手紙を通して教えていただいた次第です。

南無阿弥陀仏

宮岳文隆拝

平成十四年十二月九日

撰 取 山 心 光 寺